Doc. 1943

(53)

P443

時局講演資料（指導者用）

緊迫せる最近の情勢

極秘

情報局

昭和十六年八月

本冊子は當局一情報官が八月十三日某省講習會に於て中堅指導者層を對象として二時間に亙り口演せるものを速記したものである。尙ほ若干檢討を要すべきものあるも時局指導者の參考として印刷配布することゝした。內容秘密に亙る點あるに付取扱ひには注意せられたい。

IMT 413

緊迫せる最近の情勢

緒言

世界情勢が日一日と複雑を極め、支那事變も歐洲戰爭も共に深刻重大化して參りました。且つそれが擴大の一途を辿つて居ります。アメリカは既に實質的に參戰をして居ります。世界は今や正に世界戰爭時代になつたと云ふ感じが致します。この世界戰爭がどう云ふ性質のものであるかと云ふ歷史的な意義をば考へることが必要であります。これは既に識者に依つて云はれて居りますやうに前世紀から今世紀の初にかけまして發展を遂げました自由主義文化、英米佛の世界支配態勢を維持せようとする舊秩序側とこれを打開革新をして、政治、經濟、文化の新しい合理的なものを作らうとする樞軸側との二大爭鬪戰であつて正に世界大轉換期であると考へます。

我が國も大體滿洲事變以來今日迄、大陸の支那問題を中心と致しまして戰つて參りました。これに伴つて日本の國際外交も進められて參りました。其の實績は我々がよ

IMT 413

く知つて居りますやうに悪戰苦闘の連續の歴史でありました。此の今日迄の我々の努力が眞に成果を收めるか、どうかと云ふことは今正に展開せられんとする世界戰爭に依つて決定せられると云ふことになると思ふのであります。「今日迄我々の努力に依つて花を咲かせたものが、それが眞に實を結ぶかどうかと云ふことは、一に正に來らんとする世界戰爭に於て、否現に戰はれて居りまする此の世界戰爭に依つて決定せられる、解決せられると云ふことになり」、わが國は洵に重大時期に遭遇して居ります。

以下此の現時世界戰爭の狀態をば、帝國を中心と致しまして解說したいと思ひます。

帝國を繞りまする四圍の情勢は、どの方面も極めて重大で、どれが重點で、どれが末節だと云ふ具合には論ぜられませぬ。何れの方面も同樣に重大で且つこれは皆一連の關聯性を有つて居りまして、北の問題は南の問題に、南の問題は、東の問題に、東の問題は、西の問題にと云ふやうに凡てに關聯性があるのでありますが、話の順序と致しまして、北の方から東、南、西と云ふ順序に分けてお話を申上げたいと存ずるのであります。

對ソ關係

先づ北方の情勢に就て申上げます。北方の情勢とは對ソ問題であります。之は又對米問題にも關係します。これは六月二十二日獨逸とソ聯が戰端を開始しました以前と以後とでは、大分情勢が變つて來て居ると云ふことは、これは誰もが考へることであります。これ迄の北方問題に對する吾々の考へ方は、日本としては支那事變を戰ひつつ而も此の國際政局に處する爲には大體に於て北守南進、北を守り、南に進むと云ふのが大體の傾向であつたと云へます。日ソ中立條約もそれが爲に成立しました。所が獨ソ開戰に依りまして、我々の豫想して居らなかつた新たなる情勢が北方に生れて參りました。

そこで今獨ソ戰況と云ふものに就て一應の觀察を申上げる必要があります。獨逸はソ聯に對して、どうして攻擊を開始したかと云ふ、此の點はもう既に新聞紙等に依つて十分傳へられて居りするので詳しく申上げる必要もない位でありますが、問題が極めて重大でありますから一應御話を申上げます。獨逸の今回の戰爭目的はヨーロッパ

緊迫せる最近の情勢

IMT 413

新秩序建設の癌を除くと云ふのが、中心であると考へられるのであります。ヨーロッパ戰爭はアメリカが參戰して英國を援助すると云ふことに依りましてどうも短期戰には終り得まい、長期戰的傾向を辿る。どうしても獨逸と致しましては、ヨーロッパ大陸をしつかり固めて長期戰態勢に應ずる姿勢を執る必要があると云ふことが重大な問題であると考へた結果だらうと思ふのであります。

今回のヨーロッパ戰爭は獨逸とイギリスの決戰でありますので、獨逸はイギリスを武力戰的に一擧に解決したいのは山々でありますが、遺憾ながら獨逸は海軍力が劣勢でありまして、イギリス本土に對しまする上陸作戰が非常に困難である、これはやつて出來ないことはないでせうが、非常に困難である。而もやるにしても相當の犧牲を拂はなければならぬ。又やつて成功を致しましてもイギリスは未だ他に殘る屬領に於て米國と一體となつて獨逸に對して長期戰をするだらうと云ふ具合に考へられます。そこで獨逸と致しましては、對英作戰よりも先づ此の後を固める、後をしつかり固めておけば對英作戰と云ふものゝ價値が非常に低くなつて來る。先づ此のヨーロッパ新秩序建設の癌でありまするソ聯を叩き、然る後地中海に出ましてイギリスの生命線の樞

要地點でありまするスエズを掌握する、これに依つてイギリスの地中海方面の勢力、近東方面の勢力更に印度方面の勢力を驅逐して終へば英國は非常に弱體化されるのであります、大英帝國と云ふものは實質的には崩潰して仕舞のであります。これが最も獨逸としては確實な方法で又やらなければならない順序でありまするので此の際イギリスよりもソ聯を叩くと云ふことが戰爭目的を達成するのに必要だと云ふ具合にヒットラーは決論したと思ふのであります。これを實現するからには二正面作戰の害を受けない樣に武力戰的に見て必ず勝てると云ふ最もいゝ時期を選ぶ必要があります。

其の點から獨ソの戰力を考へて見ますると、獨逸は四月ギリシャ作戰を終りまして西ヨーロッパ大陸を殆ど平定して終つたのであります。一部兵力をマルタ島の攻擊とかエヂプト方面に派遣してありまするが、八百萬からの動員した兵力戰力と云ふものが、有り餘つて居る譯であります。これに對しソ聯は將來獨逸と戰ふ公算が非常に多いと云ふので西方に對し戰備充實を盛んにやつて居つた狀況で最近は極東方面からも兵力を引つこ拔いて持つて行つて居ります。其の總兵力は先づ、五、六百萬から一千萬と考へられます。それで時間が經てば經つ程ソ聯の戰力が充實して來ると云ふこと

になりますので、其の充實に先立つてこれを打ち破るべきで、又時期と致しましても六月の候は北方に對し作戰行動が容易である。これが九月以後になりますとモスコーの方は冬期作戰の準備をしてかゝらなければならぬと云ふやうな譯で、六月二十二日突如ソ聯に對して作戰行動を開始したと考へるのであります。

以上は獨ソ開戰に至りました經緯でありますが、次は獨ソの戰況の現況に就て申上げやうと思ひます。

獨逸軍の作戰方針は作戰の初めにソ聯軍を徹底的に叩き付ける、卽ち卽戰卽決主義であります。大體九月迄、二、三ヶ月の間にソ聯を叩き付けて終ふと云ふ計畫で、又さう云ふ自信を以て始めて居ります。ソ聯軍の方は慥かに不意を打たれた形でありまして、先づ獨逸軍の攻勢に對しましてこれを拒止する、喰ひ止める、それが出來なければ、逐次後に下つて抵抗し獨逸軍の攻擊力を消耗して、恰も支那事變に於きまする蔣介石の執るやうな戰法を執る樣であることはスターリンの放送によつても明かであります。其の後の戰況を見て居りますると獨逸軍は大體、國境線に迫る迄は非常に早い速力で、前進をして居りましたが以後、私共が計算して見ますると一日十粁位の速

度に落ちて居ります。これは今迄のやうな小さい國との作戰とは異なつて、地形が非常に廣大であります。支那大陸のやうな廣大な所であります。それから戰場に於きまする地形上の大障碍が非常に多いのであります。

大河川がある。大森林がある。それから大きな沼澤地があります。交通網が發展して居ない。今迄に獨逸軍が戰つた戰場とは趣きを異にして軍隊の行動には不便であります。それに以て參りまして今迄にないソ聯軍の抵抗が頑强であります。ソ聯軍と申しましてもソ聯兵のことでありますがソ聯兵の抵抗が非常に頑强であると云ふ樣な譯で、今迄のやうには進展して居らぬ樣であります。しかし之は寧ろ今迄が早かつたのでありまして、これが當り前であると云ふやうに考へて然るべきであります。併ながら獨逸軍の各戰線は獨逸側の計畫して居るやうに大體に於て順調に進展をして居ります。主力が前進をして居ると思はれるポーランドからスモレンスクーモスクワ道方面は特に激戰でありましてスモレンスク附近ではソ聯軍約二十個師團を殲滅して居ります。これは獨逸軍では歷史始つて以來の大激戰であると申して居ります。洵に其のやうな大激戰であつたでありませう。又各地に於ても包圍殲滅戰を實施して居ります。

大體スモレンスク附近の殲滅戰迄にソ聯軍に對しまして約百五十萬、飛行機はソ聯軍の有つて居る大多數、戰車も大多數のものに對して損害を與へて居る。從つてソ聯軍の戰力なるものは著しく低下して居ると云ふ具合に見て差支ないと思ふのであります。

それ迄に獨逸軍がどれ位の損害を受けたかと云ふことはどうも資料がありませぬので判然したことは分りませぬが、獨逸軍も今迄にない損害を受けて居ると思はれます。併ながら獨逸軍の方は工業力が非常に大きいので、飛行機にしましても戰車にしましても十分これをば補ひ得るだけの餘力を有つて居りまして全體の戰力としては餘り低下して居らぬ。若干低下した程度だと云ふ具合に考へられます。

次は獨ソ戰局が如何に推移するかと云ふことの一つの豫想判斷を申上げます。

獨逸軍の攻擊目標は大體に於てモスクワを目標にして居ると思ふのであります。モスクワには大體八月一杯に到着するのではないかと云ふ觀察が大部分でありましたがその後だん〳〵遲れ恐らく九月の末頃迄にはモスクワに迫るのではないかと思はれます。それに先つて北のレニングラード、南のキエフも九月初めには獨逸軍の手に落ち

るだらうと思ふのであります。此のモスクワが陷落すると云ふことは、單に軍事的のみならず國際政局に相當重大な影響を及ぼすことが豫想されます。其の場合世界の人の最も興味を有つて居ります問題は、スタリーン政權が果して倒れるかどうかと云ふ點であります。此の點は世界各國の觀察は未だ倒れないであらう。恰度蔣介石のやうに更にウラルの方に退りまして長期戰を續けるだらう。それだけの力は保ち得るだらうと云ふ觀察が多いのであります。從つて獨逸軍としては、モスクワに到着する迄にソ聯軍をば、徹底的に殲滅し得ない場合に於きましては、更に東のウラルの線迄、ヨーロッパソ聯と云ふものをば軍の支配下に入れる必要があります。ヨーロッパソ聯を手に入れますれば、ウラルの重工業地帶を初めヴォルガ河の新しい工業地帶と云ふものを制します。斯うなればスターリンの實力と云ふものはもうなくなつて終ふのであります。恰度これは蔣介石の四川省に居るのと同じやうになつて參ります。併ながら先刻申しましたやうに尙スターリンの政權と云ふものは、存續するだらう。さうして支那事變と同じやうな長期ゲリラ戰の戰法に出でざるを得ないだらうと云ふ具合に見られて居ります。しかし支那事變のやうにソ聯側が頑强なる長期戰をやり得るかどう

かと云ふ點に對しては各國共に出來ない、これは半年や一年まではどうか知らぬが長くは續け得まいと云ふ具合に見て居ります。さうなつて參りますれば、シベリヤ方面、極東方面に對しまして其の影響が段々表れて參つて來ることは必然であります。

現在極東方面がどんな情勢にあるかと云ふことに就て申上げますと、大體に於て表面は一般に平穩でありますが、獨ソ作戰に於てソ聯が段々不利になつて來ると、日本は此の機會を利用して必ずや沿海州なり北樺太を攻擊して取りに來るに違ひないと云ふやうな具合に彼方では憶測を致しまして盛んに戰備を整へて居る現狀であります。一部兵力を西ヨーロッパの戰場に送りましたが、主力部隊は依然留つて居りまして、更に動員した兵力を加へましたので、其の兵力は獨ソ開戰前よりも若干多くなつて居ります。それから既に戰備下令を致して居りますので國境の陣地或は防空施設或は交通、居住の制限と云ふやうなことも既に戰時の通りに行はれて居ります。沿海州方面では既に婦女子の避難が開始されて居る樣であります。斯う云ふ具合に向ふでは一朝事の有つた場合を考慮致しまして盛んに戰備を修めて居るのであります。

一方外交的には此の際日本とは出來るだけ摩擦を避けて事を起さないやうに注意致して居ります。これはソ聯の現狀としては寔に當然なことであります。國境劃定會議も其の爲日本側に有利に進展をして居ります。又日本人が彼方を旅行致しましても待遇振りは打つて變つて良くなつて居ります。斯う云ふ具合に此の際日本に對しては出來るだけ好意的態度を示して事を起さないやうにして居るのであります。併ながら一方戰備は着々充實して居ると云ふ狀態であるのであります。

獨ソ戰の影響としては獨逸と日本との經濟協定によりわが國は、日本に必要な機械類肥料を中心として物資を一億二、三千萬圓買ふことになつて居りましたがこれが來ないやうになりました爲め、物資動員計畫を進める上に於て若干の支障を來して居るのであります。

又滿洲は御承知のやうに大豆をば獨逸に賣つてそれに代る品物を獨逸から輸入して居りましたがこれも駄目になりました、其の點は獨ソ開戰に依つて我が國に經濟的に影響を來して居ります。併ながらこれは全般から見れば、大したものではありませぬ。

此の獨ソ戰がどう云ふ具合に推移してそれが極東方面にどう云ふ具合に影響して來るかと云ふ政治的な、軍事的な影響と云ふものが帝國に取りましては、極めて重大なる問題であるのであります。

よく北守南進論を稱へる人は北の方はあゝ云ふ寒い所で物資が少ないからあゝ云ふ方面は成るべく事を起さないで日本は南の方に必要な物資を開拓すべきだと云ふ經濟的見地のみから論ずる人がありまするが、これには東亞共榮圏の國防と云ふことを考へねばなりません。今北を守り南進して英米戰爭となつた場合を考へます時、英米はソ聯を必ずや利用する樣になると見なければなりません。東亞新秩序を建設する上に於きまして現在の北方の、北樺太、或は沿海州と云ふやうな所は、日本の東亞新秩序建設に對しまして一つの匕首を差し込んで居るやうなものでありまして、これは國防的に見ましても非常に不自然な不安泰な狀態にあるのであります。斯る不安定な狀態は我國にとつても洵に困る問題であると云ふことはこれは專門家でなくても誰でもが常識で考へられることであるのであります。此の國防の不安定を除くと云ふことが東亞新秩序建設に於ては非常に大事なことであると考へるのであります。しかし對ソ關係は只今極めてデリケートでありますから吾々は嚴に言動を愼む必要があります。

北方の問題に於きましては、大體其の邊に止めまして次は東の方の情勢に就て申上げます。

對米關係

アメリカ問題であります。アメリカ問題に就ては、既に色々論議が盡され寔に厄介な問題でありまするが、東亞新秩序建設上の一番大きな癌はアメリカ問題であります。我々は必ずしもアメリカと戰ふと云ふことを好んで居る譯ではありませぬが、先方が飽く迄日本の發展を抑壓するからには斷乎之を排擊するに足る國力、戰力と云ふものを充實する必要があります。今アメリカ問題に就て二、三基礎的な問題に就て觀察して見たいと思ふのであります。

第一番はアメリカの現在の世界に於きまする地位と云ふものであります。アメリカは生れてから僅か百六、七十年の新しい國でありまするが前ヨーロッパ大戰以來名實共に世界一の國になりました。天產物が豐富で工業力が發達して居ります。それにア

メリカ人の氣質が積極進取でありまして、幾多國内には弱點がありますが國勢が日に〳〵進展して居ると見るべきであります。

今回の世界戰爭に於きまするアメリカの地位と云ふものは、此の戰爭に對する決定的な價値を有つて居ると云つても過言でない位なものになつて參つたのであります。でよく言はれて居りまするやうに今の世界戰爭は英米民主國ブロックとこれに對する樞軸側との二大陣營に分れました世界の爭覇戰であります。此の世界爭覇戰に最後の決を與へるものはアメリカであり日本であり共に武力的にはまだ動いて居りません。

アメリカは今や世界干渉政策と云ふものを執つて今の國際政局に處して居ると云へます。これは歴史の本を讀めば明瞭でありまするが、何時でも世界を支配するやうな強い國になると干渉政策を執る、默つて居らぬ。ぢつとして居らぬ。彼方此方の問題に自分の考へを實現させんときかぬ氣が濟まぬと云ふ。これは人間でも同樣でありまするが、國家としても同じ本能を有つて居りまして、アメリカは御承知のやうにヨーロッパに對しましては、モンロー主義を極東に對しましては、機會均等主義を稱へて

居ります。最近はヨーロッパの問題に對しましても干渉をしまして、實質的には英國援助に依つて參戰して居ります。極東問題に對しましては、支那を援助し、日本を壓迫すると云ふ樣に之亦實質的に參戰をして居ります。斯う云ふ具合にアメリカの考へ通りに世界を指導して行かうと云ふのがアメリカの本能であります。さう云ふ所から極東政策と云ふものが生れて居ります。この極東政策は日本の大陸發展を押へる、日本の西南太平洋方面に發展するのを押へると云ふのが根本であります。從つて日本とアメリカとが、親善提携する爲には、アメリカの今の極東政策である日本の大陸發展を止め、西南太平洋に發展するのを押へる政策を止めるか又は日本が東亞新秩序建設と云ふ看板をば、下さなければ日米親善と云ふことはこれは實現が不可能であります。根本的に其の點がアメリカとは國是を異にして居ります。日米問題の癌は全く茲にあります。

この癌を除く手と致しましては、アメリカが日本をどうしても押へることが出來ないと云ふやうに日本が國力、特に經濟力、軍備、特に海軍力と云ふものをば、充實すると云ふ以外に手がありません。日本は大體この方法を取つて參つて居ります。日本

としてはアメリカに對しまして、出來るだけ摩擦を避け、自給自足態勢を一日も速かに確立する。又海軍力を充實して何時でも西太平洋に於てこれを制し得るだけの力を充實すると云ふやうに一路邁進をして居ります。それでアメリカが日本を叩きたいが、叩くことが出來ないと云ふことになつて、始めて此の太平洋問題と云ふものが一時安定を得ると思ふのですが、結局は戰つて勝負を決めなければ、太平洋の波は靜まらんと考へるのであります。只時間的に伸ばすと云ふだけに過ぎません。

現在日本は支那事變を、既に四年に亘りまして遂行致して居ります。而も其の支那事變を考へて見まするとと我が國が戰爭をするに必要な物資と云ふものは大體に於てアメリカから輸入して居ります。其の額は年に十億圓以上に上つて居りまして二十二、三種の重要な物資が含まれて居ります。鐵關係にしましても年に二、三億萬圓、石油は年に一億圓以上、銅でも五千萬圓、其の外亞鉛、ニッケル、コバルト、アンチモニーモリブデンと云ふやうな特殊金屬もあります。それから棉花、これも年に二、三億、木材、パルプ、工業鹽と云ふやうな、日本の戰爭遂行に必要な重要物資を今迄アメリカから買込んで支那と戰爭して居つたやうな實情であつたのであります。ところが日

米關係が非常に惡化して來て米國が對日經濟斷交徹底化政策を實施に移せば、日本は生存のため敢然立たざるを得ません、その場合にはアメリカと戰はなければならぬ運命は避け得ないではなからうか。今日迄日本は一意專心經濟力充實、軍備充實に努力してゐると云ふ過渡期にある譯であります。故に日本としては出來るならば米國とは無用の摩擦を避けると云ふことが得策であると云ふ具合に識者一般が考へて居ります。從つて向ふのやり方が、惡悚を極め憤慨せざるを得ない事件が續出して居りますが、我が國は凡て愼重な態度を取つて來て居るのであります。併しながら向ふがこれ以上壓迫干渉を加へて來る、恰も不正商人が全然物を賣つてくれないと云ふことになれば、これは我々の生命に關するものであり自衞權の發動、生活權の擁護と云ふことになります。此方の忍耐にも自らそこには限度がある譯であります。情勢は正に最後的段階に這入らんとして居ります。

もう一つはアメリカがヨーロッパ戰爭に正式に參加をすると云ふ問題であります。一時アメリカの參戰が非常に論議されまして、近い間に參戰をするだらうと云ふことになつて居りましたのが、獨ソ戰爭の爲に一時英國が樂になつたと云ふ所から最近は

又下火になつて來て居るやうであります。アメリカの輿論を見まするとと大體に於て武力參戰と云ふことには不贊成な空氣であります。併しながらルーズベルト大統領の政府首腦部、ユダヤ財閥を中心とするユダヤグループと云ふやうなものがアメリカを何とか參戰に導きたいと云ふので連續不斷の努力を續けて居ります。從つて漸次參戰の方向に輿論が傾いて來て居ります。アイスランドにアメリカの軍隊が進駐をしたと云ふことはもう最大限迄やつた譯であります。參戰は時間の問題であります。從つて我が國は先年日獨伊三國條約を締結した眞意に鑑みましても亦世界新秩序建設の理念から考へましてもアメリカが正式に參戰をすれば日本は重大なる決心をせなければならんと考へます。日本は常に道義的に考へ日本自身のことは日本獨自の見地からことを決定すべきであります。日本としては常に萬全の準備をしておかなければならぬと思ふのであります。

アメリカに對しまする問題は其の邊に止めまして次は南方の問題に移りたいと思ひます。

南方情勢

世界の趨勢は今迄の國際貿易、自由通商取引時代から經濟ブロックを作つて自分の勢力範圍内に於て自給自足をして行くと云ふことになりました。この自給力の大小が戰爭の勝敗に大きな要素となる時代であります。卽ちヨーロッパの新秩序、アメリカを中心とする新秩序と云ふものが日に〳〵建設されて居るのに對しまして、日本としては東亞を中心とする大東亞共榮圏と云ふものを確立する必要がこれは世界の趨勢から絶對的要求となつたのであります。最初日本は支那事變の解決に依つて、日滿支の經濟自給の建設を目標として居りましたが、今この世界情勢の變轉により更にこれに南方を含む必要がある殊に石油問題からして必要であつて、現在では大東亞共榮圏と云ふ名前を以て示されて居ります。これが爲には此の際日本は武力に依つて南方を占領するのが最も簡單明瞭ではないかと云ふ意見が今年の二、三月頃出たことは皆樣御承知の通りであります。所が其の後政府のやるのを見て居りまするとと一向此の武力

戰と云ふやうな強硬政策を取らないで日佛印、日蘭經濟の協定と云ふやうな具合に凡て外交交渉に依つて南方政策を進めて居るのであります。此の南方問題は實は對英米問題である爲に日本としては支那事變を現に遂行し、北方の情勢が安定しないのに、更に南方問題の爲に武力を使ふ。卽ち直ちに英米と武力戰爭に入ると云ふことは日本の經濟の現狀からして餘りにも行き過ぎて居ると云ふやうな所から出來るだけ外交で以て平和的に經濟的に提携をして日本に必要な國防物資をば獲得すると云ふことを中心として今日迄來たのであります。これは武力を背景として日本に近い所から話が進んで居ります。卽ち支那の南の方に隣接をして居りまする佛印問題が先づ第一に取上げられました。昨年九月に我が軍が佛印に進駐致しました。目的は重慶に對する封鎖作戰でありました。佛印方面から鐵道に依つて非常に多くの物資が昆明を經て重慶に輸送される。これを遮斷する。もう一つは、再開を豫想されるビルマルートの爆擊、これに依つて重慶に行く物資輸送を止めると云ふ重慶封鎖作戰の一部として北部佛印に進駐が行はれました。此の北部佛印進駐は實は相當長い間外交交渉が行はれてうまく參らない。最後には我が武力を背景として最後通牒的な態度に出て、始めて向ふが折

れて出たと云ふやうな經緯がありまして、アメリカも相當此の問題には神經を尖らせて居つたのであります。併ながらまあ佛印位ならばこれはまあ己むを得んと云ふやうに默つて終つたのであります。其の後フランス本國の態度は日本に對しまして協調的になりまして、日佛印經濟協定が結ばれて日本に必要な國防物資を年に七、八千萬圓持つて來ると云ふことに話合が出來たのであります。

一方蘭印に對しましては小林商工大臣が最初に參られまして、蘭印當局と協商を進めました。そして先づ日本に一番必要な石油をば買取ると云ふことに就ての交渉を進めまして、日本側から要求しました半額位約百八十萬噸と云ふ石油を日本に賣ると云ふ話合が纏つたのであります。次いで芳澤使節が參られまして交渉を續けました。

その蘭印交渉の內容は次のやうな問題であります。

第一番が、日本人の入國を許せといふ問題であります、この問題に對しましては、日本人の入國といふことが蘭印にどうしても必要であり、然もその勞働が蘭印では得られぬといふ場合にはやるけれども、現在以上の入國は困難だ、まあ「許せぬ」といふ工合に向ふは斷つて參りました。

次には、蘭印において日本人が企業或は營業をするといふことを認めよ、といふ要求であります。この問題に就ては日本の政府は、蘭印の天然資源の開發は尙不十分である、日蘭兩國は經濟的において依存の關係にあるから日本人の營業企業を許して貰ひたい、といふ要求をしたのであります。ところがこれに對しまして向ふは、日本は蘭印に經濟的な特殊權益をば設定するんだ、然もこの蘭印の民衆はオランダの官憲の保護に依つて非常に惠まれた生活をして居る、といふ風に向ふは詭辯を弄して反撥して居るのであります、或國だけに優遇するといふことは蘭印としては認めることが出來ない、これは一に蘭印が自主的に決定すべき性質のものであり、營業に就ても蘭印の土人の將來における營業權を保留する必要がある、といふことをば强調いたしまして漁業や日本の進步發達いたしました醫術の進出を拒絕したのであります。

その次には通信連絡問題を提出いたしました。日本との航空連絡といふことに就ては蘭印は協力するが、然し現狀では何も約束が出來ないといふのであります、それから海底電線を敷くといふ交涉をいたしましたが、これは、今その必要がない、それから向ふで日本人が漁業をしたいといつた場合に、開かれて居ない港を開くといふ問題

に就ても、これは一應檢討をする必要がある、といふことを申しまして日本の要求を斷つたのであります。

その次は貿易の問題でありますが、蘭印の貿易といふものは多數國との貿易に依つて將來輸出の自由を保留しておく必要がある、それから輸入は戰時狀態にあるから國家として十分これを管理する必要があるといふ見解を採つて居ります。それから現在のやうな國際情勢の變轉する場合においては長期に亙つて契約をすることは出來ぬといふ申分で、先づ六ヶ月の契約をしたのであります。向ふでは蘭印に餘つて居る物資――砂糖とか、コーヒー、木材といふやうな物を日本に輸出したい。ところが日本にもそれは餘つて居る。それで日本の方では現在日本に必要な物資が欲しいのだ、卽ち石油、ゴム、錫といふやうなものが欲しい、ところがこれは出來るだけ日本にはやりたくないといふ見解を採つて居ります。併ながらこの交涉までも終りといふことになればもう殆んど日蘭印會商の意味がなくなるのでありまして、石油に就きましてはさつき申しましたやうに、日本の要求の約半數の量を認めました。それからゴムも極めて最少限度――約一萬二、三千噸、錫も約〇千噸といふ數量を認めました。これは

多くやると日本はシベリア鐵道を通つてドイツに送るといふ工合に向ふでは考へまして、この點を非常に向ふでは疑つて居つたのであります。

オランダがかういふ態度を取りましたのは、勿論後に英米の兩國が絲を引いて操つて居つたからでありまして、日本は支那事變のために國力を消耗して居る、アメリカやイギリスを相手にして戰ふだけの力、特に經濟力といふものはない、從つて强硬的態度に出ても大丈夫だ、日本はもう武力進出をやらぬといふ樣な考へを持つてかういふ態度に出て來たのであります。併ながらやはり內心では何といつても日本といふ國は直ぐお隣りに居る强い國で、アメリカ、イギリスといふ國は遠い所に居つて、果して蘭印のためにまで生命を賭して戰つてくれるかどうかといふ點は非常に疑問でありまして、日本のこの强硬態度、特に武力進出といふ點に就ては非常に恐れて居ります。現に蘭印の各島々には日本の上陸作戰に對する障碍物を設置するとか、或は日本の落下傘部隊が着陸をするといふことを顧慮して、凡て廣い場所は掘開してしまい、道路、鐵道といふ所にはトーチカを造るといふやうなことを盛にやつて居ります。一方アメリカから飛行機を買入れる、軍艦を買入れる、蘭印に居る士人に對しまして强制

徵兵を實施するといふ具合に日本に對しまする戰備を日夜汲々として實施をして居る實情であります。かういふ工合に日蘭印の會商は一年に亙りまして續けられましたが、結局帝國は殆んど得るところなくして終つてしまつたのであります。そこで六月の中旬頃と考へまするが芳澤代表は蘭印交涉を打切つて引揚げるといふことになつたのであります。

この日蘭交涉の決裂に對しまして日本がどういふ態度に出るかといふ點に就て、我が國內は勿論、世界各國はその後の出方を非常に注目をして觀て居つたのであります。これに對しましては政府としても勿論對策を考へ着々準備が進められて居つたのであります。その時に偶々六月二十二日に獨ソ開戰となつて、日蘭會商の決裂後の處置といふものが促進をせられるといふことになりました。日蘭會商が決裂いたしまして蘭印が日本を舐めてかゝる、さうすると佛印の方も日本といふものを多少侮るといふ傾向が見えて參りました。日本と經濟協定は結んで、日本に米初めいろ〳〵な物資を送るといふやうな契約をして居つたのにも拘らず、日蘭會商決裂後はどうも物が足らぬとか、都合が悪いとかいつてこちらへ出すのを出澁つて參つたのであります。一方

英米の對日包圍經濟政策が段々強化され又、ドイツからも物資は來ないやうになるといふ工合になつて參りまして、帝國としてはこの際東亞新秩序建設のためには佛印と緊密なる協力關係を設定する必要があるといふことに態度が決定をいたしました、茲に南部佛印工作が初められることになつたのであります。

佛印に對しまする今回の工作に就て若干申上げたいと思ひます。佛印のその後の態度は實はあまりよくありませぬ。日本軍の駐屯して居りまする北部佛印においては、これは日本軍が居るから己むを得ず協調的態度を採つて居りまするが、南部佛印におきましてはユダヤ財閥、華僑、或はベタン政府に反對して、ロンドンに居りますドゴール派といふやうな反日的な者がグルになりまして、目に餘る反日行爲をやつて居つたのであります。さういふところからしても日本としては南部佛印に兵を進める理由が十分ありました。六月十四日帝國政府はフランスに駐在して居りまする加藤大使に訓電を出しまして、ヴィシー政府に對し南部佛印に日本軍が進駐をして佛印の共同防衛に當るといふ交渉をするやうに命じたのであります。而して、その回答期限は十九日の正午までにせよ。といふことになつて居りました。一方昨年の北部佛印の交渉の經

驗に鑑みまして、今度は政戰兩略、極めて緊密にやつて、早く佛印問題を解決しなければならぬといふ見地から、軍の方におきましても佛印進駐の準備が進められたのであります。フランスのベタン政府側では、大體今の世界情勢から觀てドイツとは協調して行かなければならぬ、又日本とも協調して行かなければならぬといふ大方針を採つて居りました。佛印問題に對する日本の今回の態度が極めて强硬であるといふことを知りまして、向ふは全面的にこれを承認することになつたのであります。この佛印進駐は武力によることなく、皆さんが御覽の通り經過は非常にうまく行つて居ります。これは矢張り周到なる準備と斷乎たる實行の賜であゝ云ふよい結果になつたのであります。

この佛印進駐の共同防衛の議定書は六月二十九日ヴィシーにおいて調印せられまして、その議定書は既に發表せられて居る通りでありまするが、日本軍が南部佛印に進駐したといふことは、將來の南方政策を進める上におきまして非常に重要な意義を有つて居るものであります。佛印自體がさつき申しましたやうに非常に不安定な狀態にあつたのを日本軍の進駐により之を安定せしめ、それから日本としては必要な物資、

特に國防物資を確保することが出來、米の問題も安定する。それから重慶に對しましては非常に壓力を加へることが出來る。更に又英領馬來に對しましても、蘭印に對しましても、フイリッピンに對しましても、位置としていゝ位置に居りますから、軍事的にも政治的にもこれ等に壓力を加へることになつたのであります。この佛印問題は我が南方政策の一節であります。蘭印は最近は愈々日本軍が眼の前に出て來た。次は其處を足場として蘭印に攻入るに違ひないといふやうな非常な恐怖を抱いて居ります。泰も亦日本軍が直ぐお隣りに來て居るといふ譯で相當な脅威を感じ、一方英米から壓迫をせられて居るといふ所謂板挾みの狀態になつて來て居るのであります。泰は恐らく當分嚴正中立を維持するであらうといふ工合に考へられますが英米の策動は辛辣になりました。

日佛共同防衛が成立いたしまして、南部佛印に我が軍が進駐したことに依つて南方政策の一節が解決せられました。これは洵に適當なる、妥當なる方策であつたいふことがいへるのであります。

この點に就て外國筋でいろ〳〵面白いことをいつて居りますが、最近私が見た情報

の中でかういふのがあります。イギリスのデーリー・メールの論說であります。

「日本にとつて佛印進駐は一種の妥協である。日本はソ聯に對しイタリアを決め込まうと欲して居る。」その意味は、イタリアがフランスとドイツが戰爭をして居るときは中立を守つて居りましたが、愈々フランスが負けかゝつてパリが落ちるといつた一週間前にドイツ側に參戰したと同樣な筆法で、獨ソ戰爭で愈々ソ聯がやられてスターリンが沒落するといつた時にきつと日本はドイツ側に立つだらう、といふことを意味して居ります。「そして現實にその對ソ攻擊の準備をして居る、然し日本はソ聯の土臺がしつかりして居る間に、ソ聯を攻擊しようと考へて居る譯ではない。」日本はソ聯に對して攻擊を準備しては居るが、まだソ聯から日本に空襲に來たり、關東軍と大いに戰ふ力がある間は日本は手を出さぬといふ意味でありませう。「又、一方では日本は蘭印は勿論濠洲をも威嚇しようと欲して居る、然しこれも英國や米國の力に眞正面から打つかつて行かうといふのではない。」これは日蘭會商決裂後の時のやうに、直ぐに武力占領をするといふことになれば直ぐに英米と眞正面に打つかる、だからそれはやらぬといふ意味であります。「日本は先づ佛印を要求することに依つて樞軸國に一應の貢獻

をしたのだとドイツを納得させる。」これは日本が佛印進駐をやる、日本が南方に勢力を伸ばすといふことは、いひ換へれば英米としてはそれだけ壓迫を受ける、現にアメリカは日本に對しまして經濟宣戰卽ち資產凍結を令し、それに追隨してイギリスは日英通商條約を破棄し、蘭印はこれに又追隨しまして資產凍結令を實施をして居ります。これに依つて樞軸側に好意を寄せると同時に、英米に對しましては、日本は英米の權益を直接に脅威するものではないと思ひ込ませようとして居る。佛印進駐迄は英米の權益には一向觸れて居らぬが、外の所は皆英米の權益に打つかつて來る譯です。それだからそれはやらぬ。「然し英國と米國とが太平洋におけるかくの如き重大なる勢力的均衡に無關心であり得ないことは明かなことである。日本が南進をするといふことは英米としては默つて見て居れない。日本が佛印に進出することは日本が莫大な鑛物資源を握ることになるのみならず。日本は英米その他聯合國に對し軍需品援助の道を斷つことが出來る。これよりも更に重要なのは、日本が佛印を獲得すれば日本に太平洋における極めて改善された戰略的地位を附與する、日本は泰國を通つてシンガポールに陸上から攻め入ることが出來る。英米兩國は極東における如何なる事態に對しても

無準備ではない。」といふ風に、盛に對日威嚇宣傳をやつて居る現狀であります。これはデーリー・メールの論說でありますが、これはイギリス側のいつて居る得手勝手な熱であります。我々の考とは合つて居らぬのでありまして、日本が北部佛印から南印佛印へ兵力を出したといふ點に就て向ふではさういふ工合に觀察をして居るのであります。

この佛印進駐は獨ソ開戰後日本がどういふ態度を採るだらうか、北に出るか、南に出るか、或は支那事變だけで出る餘力がないだらうかといつていろ〳〵判斷に迷つて居りましたが、今度初めて實施しましたのが南部佛印進駐であります。この意味からして世界的にこの問題はセンセーションを卷き起しました。特にアメリカは言論を非常に煽つて、對日强硬政策をとれといふ輿論を喚起して居ります。日本に對しては所謂融和政策といふものではいかぬ、日本に對しては强硬一點張りでなければならぬといふのが符節を合はしたやうにアメリカの言論を支配して居ります。これは勿論アメリカ政府或はユダヤ人の策動が確にあると思はれます。併ながら武力的な壓迫といふやうな意見は殆どありませぬ。先づ經濟壓迫に依つて日本を苦しめよう、それだけ

で大丈夫目的を達するものだといふやうに日本の經濟力を非常に見縊つて居るのであります。そこで六月二十六日アメリカは我々の豫想して居りました通り資産凍結令を發動し石油の輸出統制を強化し發動機用燃料、航空機用潤滑油の輸出禁止、生絲全部の凍結を行ひました。資産凍結令の實施の狀況を見てみますると、先づ全面的に許可制にしてしまう、そして日本の今後の出方を見て一々手を加へて行かう。卽ち政治的に利用せようといふ方策を採つて進んで居ります。武力以外の對日壓迫の手はこれで大體出盡したと謂へます。

イギリスは米國に追隨いたしまして日本に對しまして、通商條約を廢棄いたしました。これは實質的にはイギリスの損になるばかりで、我々としては大して痛痒を感じないのであります。

蘭印も又英米に追隨いたしまして資産凍結を命じましたが、これはアメリカよりは非常に手ぬるい樣であります。單にさういふ聲明を發したに止つて居る。實際やれればさつき申しましたやうに日本の實力發動といふことが恐れられるのみならず蘭印自體が困る譯だから單にゼスチエアをやつて居ると思はれるのであります。

かういふ工合に佛印問題を切掛といたしまして英、米、蘭の民主々義ブロック群が日本に對しまして經濟壓迫の戰法を露骨に實現して來たといふことは時局が實質的に本格的に惡化して來た譯であります。更に經濟壓迫だけでなく、日本に對しまして軍事的な包圍工作を進めて居ります。その一、二の實例を申上げますると、シンガポールはイギリスの極東における根據地であります。これを取られますると、イギリスの極東政策といふものが目を失ふことになります。非常に大事な所であります。その極東基地を保護するといふ意味から、英國は泰に對しまして軍事基地を要求して、若し日本軍が佛印方面から前進したならば、これを泰において食止めるといふ考の下に軍事基地の提供を强要して居ります。又極東に英本國から軍艦を增派して居ります、印度から馬來、ビルマ方面に兵力を增加して居ります。それからイギリスは支那と、軍事同盟とまではいかぬでせうが軍事合作をいたしまして、日本が若し南進をした場合においては支那軍の應援を求めるといふことを企圖をして居ります。現にビルマ方面の國境には支那軍が苦干來て居ります。アメリカはマックアーサー將軍が指揮しましてフイリッピンの陸空軍をば統一して、本國の軍隊と凡て編合をするといふことにい

たしました。現在南方敵性諸邦の陸軍兵力は歐洲戰爭前の二倍半、空軍は七、八百機以上、海軍は主力艦二隻、航空母艦三隻、その他百隻以上に增加されて居る現況であります。かういふ工合に軍事的にも對日包圍工作を着々進めて居る現狀であります。

今申しましたやうに佛印進駐までは先づ英米と武力摩擦は避けられて來たのでありますが、これから先は如何なる狀態に於て如何なる國と深刻なる摩擦を越すかも知れず常に武力戰爭の場合をも覺悟しなければならぬのでありまして、現情は將にその一歩前にあるといふ狀況であります。南方情勢は以上の樣でありますがこの問題は船舶と云ふことが重大要素になると考へます。

支那事變

次は支那事變といふものに就て申上げたいと思ひます。支那事變といふものは、かういふ國際政局の生じた場合においては日本としては一日も速かに之を解決すべきだといふ意見が相當國民の中にあるのであります。が果してこれを一日も速かに解決し得る方法ありやと反問しますと、これはありませぬ。支那事變の本質といふものをよく考へてみれば、さういふことはいへないのであります。武力戰的に短期速戰卽決が困難であるといふこともあります。勿論軍當局としては速戰卽決主義で軍を進めて居るのでありますが、これも支那といふあの廣大だ地域において作戰する以上、これはどうしても短期速戰卽決に終らせ得ない、數年かゝるといふことは已むを得ないと觀なければなりませぬ。それに支那といふ所が列强の半植民地でありますために、支那戰爭が單に重慶相手の戰爭でなく、支那を舞臺とする世界列强の戰であります。日本は重慶に對しまして經濟封鎖戰を今徹底的に强化してやつて居ります。今殘るのはビルマ・ルート一本になりました。重慶の海外交通路はビルマ・ルートが唯一命の綱といふことになりまして、現在でも英米はこれに對して相當な協力をいたしまして、月に一萬五、六千噸の補給力を有つて居る現狀で決して輕視を許さないのであります。併しながらあの廣い支那から申しますれば月に一萬五千噸位の補給では到底ものにならないのであります。重慶側が非常に窮乏して居るといふことは既に屢々新聞紙において傳へられて居る通りであります。重慶方面の財政經濟狀態が逼迫して居るといふことは、我々の單なる宣傳ではなくて、我々の想像以上に達して居るといふこと

がいへると思ふのであります。現在この重慶政府の最も困つて居りまするのは惡性インフレでありまして、最近私共の得た情報では、新紙幣の發行高毎月五億圓に達して居ります。支出が收入の二倍半に達して居り、その補塡はこの紙幣の亂發に依つて補つて居る。ところが經濟封鎖に依つて物資が來ないといふために物價が非常に高いものになつて居り、如何に英米が重慶經濟援助をするといつても、我が經濟封鎖に依つて物資が來ないといふことになりますれば惡性インフレが益々日と共に高くなり屈伏せざるを得ないことになります。この意味で私共はこの經濟封鎖戰といふのを非常に重要視して居るのであります。重慶は今日においては日本に對する勝目といふものは來るべき世界戰爭である。卽ち豫想せられる日米戰爭、又は日ソ戰爭において日本が全國力を消耗する、さうすれば支那事變から手を引かざるを得ない、大陸から力を殺がざるを得ない、その時に支那軍は總反擊を實施して支那事變の總決算をする。そして最後の勝利を占めようといふ工合に考へて居るのであります。

これに對しまして日本は武力的に觀ましても、經濟的に觀ましても、支那の蔣介石が考へて居るのとは全く逆の性質を有つて居ります。現に我國は大動員を實施をし

て、來るべき國際情勢の變轉に處する力を有つて居る狀況であります。人員動員なんかは將來やり方がうまく行ければまだ〳〵澤山の動員が出來ます。ドイッでは我國よりも人口が少いのに拘らず八百萬からの動員をして居ります。日本は一億からの人口がありまして、まだほんのその一部が動員されて居るといふ譯であります。勿論これに伴ふ軍需品の整備も十分あるのであります。支那に消耗して居りまする經濟力は我が國力の一、二割臺でありまして、極めて少いのであります。多くのものは支那に於ける建設事業に使はれて居ります。支那事變そのものゝ實費といふものも日本の資金計畫から觀まして是れ亦一部に過ぎませぬ。主力は生產擴充、陸海軍の軍備充實、民需といふやうなものに使はれて居ります。支那事變費といふものは極くその一部に過ぎないのであります。又支那の建設が進みまして安定して參りますれば支那の經濟力を利用し得るといふことになりまして、支那事變費の負擔といふものは漸次輕くなつて參ります。さういふ工合に現在占據して居ります要點をしつかり押へ、出來る丈支那の經濟力を利用するといふことにして參りますれば、如何に蔣介石が國際情勢を利用して日本に反抗して參りましても決して破れることはありませぬ。大體蔣抗日軍に

は總反擊の能力はないと思いますが、日本軍としては却つて攻めて來て呉れゝば、早く始末が付いていゝと考へて居る位であります。

故に支那事變といふものは如何に國際情勢が變轉しても現情勢のまゝで推移し得るといふ自信があるのであります。我々は支那事變に對しましては以上の見地から確乎たる不動の信念を以て、今後とも如何に情勢が變轉しても最後の勝利を得る迄、重慶政權をやつつけるまではやり通すといふ固い決意を重慶に反映する必要があります。

わが國力と國民の覺悟

大體以上を以ちまして我國の四圍の國際情勢を申述べました。もうこれに依つて十分お分りのやうに、日本が現下の情勢下において如何に重大なる場面に打つかつて居るか、然もそれが皆瀬戸際まで來て居ります。北の方を見ましても、南の方を見ましても瀬戸際に來て居ります。結局北の問題も南の問題も東も西も皆同じ性質のものになりました。結局は世界戰爭――世界の歷史的變革のための使命遂行のために最惡の事態に處するといふことになり、我々は非常なる覺悟を決めなければなりません。

吾々は決して戰ひを好むものではありません。しかし現時の情勢はわが國にもう最後の覺悟をはつきりと要求して居ります。勿論我々は喜んでこの國難を突破する覺悟を持つて居ります。併しながら次に豫想せられる最惡の事態は滿洲事變、支那事變以上更らに大きな規模となりませう。兵は一國の存亡を決するものであります。そこには我が國力、特に我國の經濟力の現段階といふものをよく考へて愼重に、十分なる準備を整へて、時機を捉へて失敗のない樣にやつて行かなければならぬ、これが爲政の局に當る者としては十分に我國内外の情勢を判斷をして、國家の指導を誤らぬやうにして行かなければならぬといふことになるのでありまして輕卒なる言動は嚴に愼まねばなりません。

そこで我が國内問題として一番問題になりまするのは、日本が今までの平和態勢から速かに戰時體制に移る、總力戰體制に引移るといふことであります。既にこれはいろ〳〵叫ばれて居るのでありますが、中々實效が擧つて居りません。取り敢へずどんな點にこれから政府としては着眼してやつて行かなければならぬかといふ點を申上げますると、物資動員計畫といふものはこの情勢において再編成をする。これは國民

の日常生活に直接に響いて來る問題であります。これは英米の對日壓迫が強化されて參りましたから、今まで英米から來て居つた二十億近くの物資といふものが入らなくなつた、これを東亞圏において自給自足する。その東亞圏といつても日、滿、支、佛印、泰といふやうな、日本の確實な勢力圏内において求め得られる物だけが確實な譯であります。その他の蘭印にしましても馬來にしましても、或は印度、濠洲、或はソ聯、英、米といふやうな方面は段々物を取得し得る公算が少くなつて參ります。國際情勢が惡化して來た今日ではこれは當てにならぬといふことになつて參りました、我々はこの外國から物資が更らに來ないといふことに因りまして日常生活にも相當の不自由を感ずる樣になるといふことは覺悟しなければならぬのであります。眞の經濟戰となります。」

その次は國家總動員法の全面的發動、これは最近「金屬類特別回收」或は「重要產業營體令」、「港灣運送業の統制」、「配電統制」、それから最近の「株價對策」、或は「農產物の價格に對する統制」とか、次から次へと只今審議せられて居るのでありますが、結局これは全面的發動といふことになります。そして政治、經濟、社會の各部面

に至り眞の戰時體制が着々準備されつゝあります。この一つとして人員動員、或は國民動員――極く一部の男といふものが戰線に出動して居りますが、國民の大多數の者も國家の任務を分擔し、勤勞に當るといふことになります。俺は金持だから遊んで居るといふやうな者が一人でもあるといふことを許さぬ狀態になつて參ると思ふのであります。さういふ工合に國家總動員の全面的發動といふことが豫想されます。

その次には防空緊急對策といふ問題であります。今回防衛總司令部が設置せられまして、山田大將が司令官に親任せられました。又政府は第二豫備金から三千萬圓を支出しまして先づこの消防、交通、通信、食糧貯藏、電力保護といふやうな點に重點を置いて防空緊急對策を實施することになりました。先程內務省の次官通牒を以て防空緊急對策の促進に關する通牒を出しまして、民間としては先づ消防の準備をしつかりやれ、防彈の準備をしつかりやれ、それから救護の準備をしつかりやれ、僞裝の準備をするといふやうな點を要求になりました。併ながらこれが稍當局の考と違つたやうな、あまり行過ぎたりして居る點があるのでありまして、この點は特に皆さん方からよく一つ責任當局者の指導を徹底さすやうに努めて頂きたいと思ひます。例へば防空

壕を掘るといつても、これは個人用の防空壕はまだ掘らぬでもよい。公共用の防空壕は官廳公共團體において資材を準備して、準備が出來たら掘れといふ工合に指令したところがまだ資材がないのにも拘らず無理して强制的にやつて居るといふやうな所もあります。それから防毒面がないといつて大騒ぎして居る。これも今内務省で準備して居ります。これは警防團とか、警察官とかに渡るので、一般には渡らないのであります。これはないのでありますからその應用對策といふことをやればいゝのであります。又、防毒問題は餘り恐れる必要はありませぬ。それから避難もよぼ〳〵の老人とか、子供は隣組位で一つの避難壕を造つて避難さす。それ以外の男女子といふ者は皆居殘つて消防に當り、治安維持に當るのであつて、逃げ去つて安樂として居るといふやうな者は一人として許されぬのであります。更に食糧貯藏にいたしましても農林省としては只今食糧貯藏の準備をするやうに着々計畫を進めて居ります。これは然し完全には行きませぬでせう。國民の嗜みとして現在の配給で喰延して三、四日分の物は貯藏しておく、それ以上一ヶ月分も買込んで、只でさへ物資が不足して居るのにそれに拍車をかけるといふのはよろしくないのであります。

この外防空問題に就きましては、敵の飛行機がどういふ狀態で來るかといふことを先づ一應概念的に決めておく必要があると思ふのであります。今ロンドンを空爆して居る、モスコートを空爆して居る、重慶を空爆して居るといふやうなことが來るべき戰爭において日本に實施せられるとは考へられないのであります。幸に日本は國土が非常に惠まれた地位にありまして、然も近隣に居りまするソ聯、フイリッピン、或はアメリカの航空母艦にしましても、大編隊を以て威力のある爆擊機を以て日本本土を空襲するといふことは非常に難しいのであります。勿論陸海軍としては萬善の準備をいたし、全努力を拂つてこれを擊退することに努めますが、制空問題の特色として一部の飛行機が入つて來るといふことは考へられます。しかし一部の飛行機が來て爆彈を落してもこの日本の火災に弱い家屋の特性からして、火災に對しては行過ぎる位準備をしなければならぬのであります。さういふ點に重點があると思ふのであります。一千機も二千機も飛んで來て爆擊の雨を降らすなんといふことは、これはあまりにも日本の國防に對する考へ方が足りませゝ。まあ然し關係當局としては行過ぎる位に準備をしておく必要があります。しかし、これがために一般の者が自分の本務を疎かに

して不安に流れ、流言蜚語を飛ばして治安を攪亂するといふやうなことは、これは戰時下國民として許すべからざることであります。內務省系統の方が非常にお骨折りになつて居る點であると思ひますが、どうか、さういふ點は一つしつかり指導して頂きたいと思ふのであります。

その外いろ〳〵な問題がありますが、時間もありませぬからこの位にいたします。最後に我國の經濟力といふ點をちよつと述べさせて頂きたいと思ひます。今のやうな英米の經濟封鎖、戰爭に對する準備——然も皆樣は毎日々々物資が不足し、統制が強化せられて、日本の國力といふものはとても弱り切つて、困つたことだといふ樣に或はお感じになつて居るのではないかと思ふのであります。

現在日本の國防資源の自給力といふものはどの位になつてゐるかといふ點をちよつと申上げますとニッケル、羊毛、棉花、原油、モリブデンを除いては勢力圈內に於て大體自給出來ます。これを支那事變が初つた年に比べて見ると劃期的な向上を來して居るのであります。然しまだ〳〵不十分でありまして益々東亞共榮圈の確立といふことが我々にとつて重要な任務になつて來るのであります。

向これに關聯しまして、日本の生產力擴充の實狀に就て申上げたいと思ひます。昭和十三年を百とすれば十四年は約一割增、十五年は約二割增であります、絕對數は向上して居ります。かういふ工合に生產力擴充計畫も、國際情勢が非常に激變をいたしまして計畫の遂行が非常に困難ではありましたが、兎に角若干宛でも向上をして居る、決して低下をして居らぬといふことを見ましても、日本の積極的な經濟力といふものは伸びて居る。まあ、それだけ國民の消費經濟といふものが統制せられ、窮窟になつて來た、それだけ國民が御奉公して居るといふ結果が現はれて居るのであります。更に此處に南方圈といふものをわが勢力下にいたしますればゴムとか、錫、タングステンといふやうな世界の特產物が我が手に入るのでありまして、これは世界一の經濟力を持つて居るアメリカでも勝はないといふことになり前途には偉大なる光明があります。

我々は益々一致結束いたしまして、現下のこの經濟苦難といふものを堪へ忍んで東亞の自給自足狀態を速かに確立するといふことに向つて努力しなければなりません。これが現下國民に課せられたる最大の任務であると信ずるのであります。この覺悟と

決意以てやつて參りますれば、之が自から外に反映しまして來るべきこの國際情勢の變轉をに對しましても、當局の適切なる指導に依りまして、案外無難に目的を達し得るかも知れません。東亞の自給圏を確立することが出來るとも考へられるのであります。あまり國際情勢が緊迫して來てどうなるかと思つていろ〳〵不安の氣を持つて居る人が多いのであります。又徒らに大言壯語して居る人もあります。當局としてもあまりはつきり方針を示し得ないために、いろ〳〵揣摩臆測がデマとなつて流行して居りまするが、さつきから申上げて居りまするやうに、當局者としては極めて賢明な、用意周到な方法で以て前進して居るのでありますので一切を政府當局者に任せて職域奉公に眞劍になると云ふ甚だ御說教めいて居りますがこれ以外に吾々の進む道はありません。

甚だ長時間に亘りまして御清聽を煩はしましたが、私の口演はこれで終ります。

1943

HM
SA 15036
#325

Proj. No. 150
S. A. No. 15036
Sack No. 3
Item No. 325

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 1943 Date: 18 June 1946

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: Recent Critical Conditions", a pamphlet designed to guide the thoughts and speeches of national leaders.

Date: August 1941 Original (X) Copy ( ) Language: Japanese

Has it been translated? Yes ( ) No (X)
Has it been photostated? Yes ( ) No (X)

LOCATION OF ORIGINAL (also WITNESS if applicable)

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: Home Ministry

PERSONS IMPLICATED:

CRIMES TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE: Propaganda instigating to aggressive warfare.

SUMMARY OF RELEVANT POINTS (with page references):

This pamphlet was published by the Information Bureau, and is a stenographic record of a lecture delivered by an official of this Bureau, August 13, under the auspices of "a certain" Ministry. Some parts of this pamphlet should be kept secret. "This is published as reference material for leaders of our nation." (Introduction)

"America is practically participating in the war. We feel that the world is plunged into World War." (P. 1)

"Whether or not we will succeed in gaining all we have worked for up till now will be decided by the world war about to break out". (Page 2)

Northern Sachalien and the Maritime Province are like daggers stuck into Japan's new order for E. Asia. From the viewpoint of national defense, this is an unnatural and unstable state of things. To get rid of this instability is important. (Page 12)

If America won't sell us the goods we need, we must exercise our right of self-defense, and we will be forced to protect our right to live. (Page 17)

Before Japanese troops advanced into French Indo-China, armed conflict with Britain and America could be avoided but from now on there is no knowing what may happen. We must always be ready to fight. Present conditions are just one step short of that. (Page 34)

Analyst 2nd Lt. Wilds

INTERNATIONAL PROSECUTION SECTION

Doc. No. 1943 Date 15 June 1946

ANALYSIS OF DOCUMENTARY EVIDENCE

DESCRIPTION OF ATTACHED DOCUMENT

Title and Nature: "Recent Critical Conditions", a pamphlet designed to guide the thoughts and speaches of national leaders.

Date: Aug. 1941 Original (✓) Copy ( ) Language: Japanese

Has it been translated? Yes ( ) No (✓)
Has it been photostated? Yes ( ) No (✓)

LOCATION OF ORIGINAL (also WITNESS if applicable)

Document Division

SOURCE OF ORIGINAL: Home Ministry

PERSONS IMPLICATED:

CRIMES TO WHICH DOCUMENT APPLICABLE:

Propaganda instigating to aggressive warfare.

SUMMARY OF RELEVANT POINTS (with page references):

This pamphlet was published by the Information Bureau, and is a stenographic record of a lecture delivered by an official of this Bureau, Aug. 13 under the auspices of "a certain" Ministry. Some parts of this pamphlet

Analyst: Rudolph Wilde Doc. No.

should be kept secret. "This is published as reference material for leaders of our nation." (Introduction)

"America is practically participating in the war. We feel that the world is plunged into World War" (P.1)

"Whether or not we will succeed in gaining all we have worked for up till now will be decided by the world war about to break out". (P.2)

Northern Saghalien and the Maritime Province are like daggers stuck into Japan's new order for E. Asia. From the viewpoint of national defence, this is an unnatural and unstable state of things. To get rid of this instability is important! (P.12)

If America won't sell the goods we need, we must exercise our right of self-defense, and we will be forced to protect our right to live. (P.17)

Before Japanese troops advanced into French Indo-China, armed conflict with Britain and America could be avoided, but from now on there is no knowing what may happen. We must always be ready to fight. Present conditions are just one step short of that. (P.34) End.

Proj No. 150
S.A. No. 15036
S&CK No. 3
Item No. 325

Hajime ITOH

"Critical Recent Conditions," printed material published by the Information Bureau, as data for wartime lecture, to be used by leaders of the nation, and marked "Strictly confidential." (Aug. 1941)

Foreword

This pamphlet is the stenographic record of a two-hour long lecture delivered by an official of this Bureau at a lecture meeting held under the auspices of a certain Ministry on Aug. 13 (1941?) before an audience of influencial leaders. There are still some points requiring further inquiry, but we print and distribute this pamphlet for what it is worth. Some parts needs secrecy, so care should be used in handling the contents of this pamphlet.

p.1 " America has practically participated in the War. We feel that the World has already plunged into the World War"

p.2 " Whether what have come into efflorescence by our efforts up to the present will actually bear fruit or not will be decided, settled by the World War about to break out, nay, now being fought."

p.12 NORTHERN SAGHALIEN and MARITIME PROVINCE is something like a dagger stuck into JAPAN's program for building the New

Order of East Asia. Looked at from the viewpoint of national defence, this is a very unnatural, unstable state of things for JAPAN, too. Everybody with common sense, not to speak of experts, will realize this. The get rid of this unstability of national defence is, to my thinking, is very important for building the New Order of East Asia."

P.17 "If AMERICA puts further pressure on us, if AMERICAN attitude becomes like that of an ill-natured merchant who won't sell us goods of vital necessity for us, this is a question of life or death to us, and our exercise of right of self-defence and our portection of right to live will come as a matter of course."

P.34 " As I mentioned above, before JAPANESE troops advanced into FRENCH INDO-CHINA, armed conflict with BRITAIN and AMERICA could be avoided, but from now on there is no knowing what intense frictions, under what conditions, with what countries, may take place. We must always be ready for armed conflict. The prest condition is just one step short of that."

p.26 → As the enveloping economic policy against us of Britain and U.S. has become stronger after the rupture of our relation with NEI and as we cannot now receive from Germany the necessary materials, we have decided to assume the attitude of cooperating closely with French Indo-China in order to establish a new orders in the Great East Asia. On June 14th the Japanese Government instructed Ambassador Kato to France that he should negociate for the occupation of South Indo-China by our troops and for the collaboration of both countries for defending French Indo-China.

p.27 → This time the army has been ready to occupy French Indo China in view to using both policy and force at a time taking a warning by ~~last year's~~ the failure in last year's negociation.

The protocol for the joint defense of French Indo-China by the occupation of our troops signed in Vichy on June 29 was already made public, and the occupation of South Indo China by our troops has a

significant meaning in our future policy for the south. The uneasiness in French Indo-China has been settled by the occupation of our troops, and now Japan has at her command the necessary material for national defense.

p.28 → The rice problem also has been settled. By this occupation we can exert pressure upon Chungking, English Malay, NEI and Philippines. The problem of French Indo-China is the first knot of our line for the south.

p 30 → Japan is trying to show her goodwill to the Axis Powers by occupying French Indo-China and at the same time trying to make Britain and U.S. think that Japan is not threatening their interests

p 34 →